



Title	「今昔物語集」の「東鳥」と「東雁」：「俚言集 覧」・芥川龍之介「偷盜」・方言意識史の中で
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2006, 40, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/9520">https://hdl.handle.net/11094/9520</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『今昔物語集』の「東鳥」と「東雁」

—『俚言集覽』・芥川龍之介「偷盜」・方言意識史の中で—

岡 島 昭 浩

『今昔物語集』巻二八—二の次の部分は、東国方言の受容史を語る際に引用されることが多い。

アツマノカリ ナキアヒ  
東 鴈ノ 鳴合タル様ニテ吉ク□タルハ、心モ不得ヌ事カナ。

（『日本古典文学大系 今昔物語集五』五五頁）

日野資純『日本の方言学』<sup>(1)</sup>では、これが吉沢義則『国語史概説』（昭和六年二月）に「東鳥ノ鳴合ヒタル様ニテ舌ダミタル」<sup>(2)</sup>と見えることを指摘し、以降、諸書に引かれるとしている。また、注で、「東鳥」とあるのは内閣文庫本B（岡本保孝手沢本）のみ」とも指摘し、「東鴈」としている大系本や小学館全集本を示し、「東鴈」が本文として選ばれている現状を示している。

しかし、吉沢が「東鳥」としたのは、内閣文庫本Bに直接よるのではないと思われる。「内閣文庫本Bのみ」というのは、日本古典文学大系が校合に使った本の中で、「のみ」と言えるのであって、こころみに明治期以降の活

字本で見ると、「東鳥」としている本はいくつも見られる。

「東鴈」としているのが、『史籍集覧 今昔物語世俗部』（明治一五年、近藤圭造）<sup>(4)</sup>・『改定史籍集覧 今昔物語』（明治三四年、近藤活版所）<sup>(5)</sup>・『国史大系 今昔物語集』（明治三四年）<sup>(6)</sup>であるのに対し、袖珍名著文庫『今昔物語選』（藤岡作太郎校 明治三六年）<sup>(7)</sup>・『今昔物語』（大正二年 尚栄堂）<sup>(8)</sup>・校注国文叢書『今昔物語』（井上頼圀・池辺義象 大正四年 博文館）<sup>(9)</sup>・『攷證今昔物語集』（芳賀矢一 大正一〇年）<sup>(10)</sup>で「東鳥」となっている。また、国書刊行会の『丹鶴叢書』（大正元年）では、「東鴈（鳥イ）」<sup>(11)</sup>、『増補国史大系』（昭和六年）では「東鳥」として頭注に「鳥、原作鴈、今従芳本」とする<sup>(12)</sup>。「芳本」は芳賀矢一『攷證今昔物語集』である。

吉沢義則『国語史概説』以降のものを見ておくと、『日本古典全集』<sup>(13)</sup>では、「東鳥（鴈）」（二二六九頁）、『大日本文庫』<sup>(14)</sup>で「東鳥」（下巻一八三頁）などとなっている。

草書の「鳥」と「鴈」とは似ており、そのことにより、どちらからどちらかへの誤写が生じたものと思われるが、どちらが今昔物語集としてよい本文であるのか、ということは本稿の目的ではない。本稿の目的は、その受容の様子を探ることにある。どちらにせよ、「鳥が鳴く東」というような、東日本の言葉に対する意識に関わるものである。

さて、吉沢義則は『国語史概説』においては「東鳥」としているが、「東西両京の言葉戦ひ」では、「東雁の鳴きあひたるやうだ」<sup>(15)</sup>と「東雁」を使用している。

吉沢義則には両方見えるわけだが、この『今昔物語集』の記事を、東国方言と関連づけたのは吉沢義則が初めて

はなく、新村出がもっと早く紹介している。明治三十七年二月一七日に東大言語学会で「東国方言の古今」の題で講演され、同三十八年『教育学術界』三月号・四月号に載り、昭和二年『東方言語史叢考』に採録された「国語に於ける東国方言の位置」に次のようにある（『新村出全集』第一卷一六三頁による）。

平安朝時代には東語は有難くない批評を受けましたので、頼光の郎党共が紫野に見物に行つた時に、其言葉遣は吾妻鴉の鳴き合ひたる如しと云ふ批評を都人から受けたことがあり、それから当時の歌を見ても東訛りは非常に卑しいと云ふこと、訛が多いと云ふことが詠んであります。

『上水内郡声音字講習筆記』（明治三十九年七月に行われ、九月に印刷。『新村出全集』第二卷による。『新村出著作集索引』の「東鴉」で、ここは採られていない。）では、

頼光の家来の多くは関東人であつた。この関東人が京都へ来て、ある時牛車に乗つて祭を見た、その珍らしさに関東人は甚だがやがや騒いで見た。これを京都人が形容して「東鳥が鳴いてる様だ」と笑ひ合つた。

「東国方言沿革考」（明治四三年七月『史学研究會講演集』三、昭和二年『東方言語史叢考』、『新村出全集』第一卷一七七頁による。）<sup>(16)</sup>にも、

やはり長保時代の出来事ですが、「頼光の郎等ども紫野に見物」の話をば、後に『今昔物語』に語伝へてある条に、東語に関する事が見えます。平貞道、平季武、坂田公時の三人が女房車に乗るて、紫野に行く途

中に、逸物の牛が余り早く引いて行くので、堪へ兼ねて、「横なはりたる音」にて「いたくな早めそく」と叫ぶ、往来の人が聞きつけて怪しみ、此女房車には如何なる人の乗つてゐるのか、「東鳥の鳴き合ひたる様に舌だみたるは心得ぬ事」である、定めて東人の娘等の物見であると思えるが、声の様子は大きいし、男声であるのは妙だと申合つたといふ話が載つてゐる。

とある。以上のように、新村出は、「東鳥」(もしくは「吾妻鴉」)を用いている。

概説書などで、この部分を「東鳥」で引用するのは、日野も示す土井忠生・森田武『国語史要説』の他に、『国語学辞典』(昭和三〇年 東京堂)の「東国方言」(中村通夫)、馬瀬良雄「東西両方言の対立」(『岩波講座日本語 十一 方言』)、徳川宗賢『日本人の方言』言語生活叢書(昭和五三年 筑摩書房)、徳川宗賢『日本語の世界』8言葉・西と東、金子彰「位相語の歴史」(沖森卓也編『日本語史』桜楓社 平成元年)がある。

「東雁」として引用するのは、『日本語の歴史』3言語芸術の花ひらく(平凡社 三三二―三三四頁)、『国語史辞典』「坂東声」(金田弘)がある。

両方の形を示すのは、日野の他に、杉本つとむ『東京語の歴史』(中公新書 四一頁)で、「東鳥(鴈)」とし、『概説日本語』明治書院(加藤和夫「第8章 方言」)で「東鳥(異本に東雁とも)」としているものである。語学関係以外の書に目を向けると、折口信夫「東京案内記」<sup>(17)</sup>にも、

頼光の四天王が牛車に乗って(中略)あづま鴉といふ異名は平安朝からあつたことや、東人の聲のわからぬこ

とは塔の上にゐる鳩の様だといった平安朝の人の批評や、(中略)東鴉の言語をわらつた人々の後が、知らず／＼の間にさうですか、いけないよなどゝいふ様に傾いて来た。

とある。

辞典類では、『大日本国語辞典』『言泉』が「東雁」を立てるが、<sup>(18)</sup>『大言海』や『辞林』『広辞林』はどちらも立てていない。「東鳥」を立てるのは、平凡社『大辞典』である。

アズマカラス 東鳥 東國の鳥。あづまは京都から見れば文化がおくれ、東國人は舉動も粗野で野鄙なので、鳥までも東國のは濁って鈍い聲に鳴くとの意から、東國の言葉の京都の言葉に比して訛の多いのを罵っている語。今昔・二八「東鳥の鳴き合ひたる様にて、舌だみたるは、心も不得ぬ事かな、東人の娘共の物見るにや有らむと思へども、音氣はひ大きにて男音なり、總て心得ずぞ思ひける。 平凡社『大辞典』昭和九年

金田一京助『辞海』、時枝誠記・吉田精一『角川国語大辞典』でも「東雁」を立てる。また、『辭苑』(博文館。昭和一〇年。昭和一七年二月の四一二版で確認。『言林』(昭和二十四年 全国書房)で「東雁」、『広辞苑』も第二版(増訂)までは「東雁」のみである。新村出本人は「東鳥」を使っていたのと対照すると面白い。第三版以降は、「東鳥」も加えられる。両方を立てるのは、山田俊雄・築島裕『新潮国語辞典』(昭和四〇年)もある。

あずま (中略)

——からす【——鳥】↓あずまかり(東雁)〔今昔(流布本)二八〕——かり【——雁】東國の方言のなまりを

あざけつていう語——の鳴き合ひたるやうにてよく似たるは（略）東人の娘どもの物見るにや有らん（今昔（鈴鹿本）二八）

とあるが、「鈴鹿本」は卷二八を有さないもので、この注記はおかしい。『新潮国語辞典』第二版ではそれを改め、「東鳥」の方には「流布本」と記すが、「東雁」の方は、「今昔二八・二」と記すのみである。

『増補俚言集覧』（明治三十二年）では、

あづま鳥（今昔物語）東鳥の啼あひたる様に

となっている。『稿本俚言集覧』（一八八〇）を見ると「鴈」のようにも見えるが、前述のように、草書の「鳥」は「鴈」と似ており、どちらであるのか即断は出来ない。

あづま鳥（今昔物語）東鳥の啼あひたる様に

『稿本俚言集覧』の見た「今昔物語」は、井沢長秀の『考訂今昔物語』によるものが多い（岡島二〇〇五）。『考訂今昔物語』は、本朝部のみのもので、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』等に類話のあるものを除き再編しており、巻次が通常の『今昔物語集』と大きく異っている。この問題の箇所の含まれる卷二八―二九は『考訂』では卷九

の二で、

東鳥あづまかしす なきの鳴あひたるやうなり（7ウ）

と見える。<sup>(19)</sup>

この部分は、漢字平仮名交じりで記されており、漢字片仮名交じりで記す太田全斎によるものではなく、後の人によるものと思われる（北村孝一（一九九三））。出典注記の「今昔物語」の後が空白になっていて『考訂』によるものと断定することは出来ないし、本文もやや異なる。

もう一つ、『俚言集覽』にこの項目が採られた背景として、当時の語に、「東鳥」という語があったことを考えておく必要がある。「俚言」を集めた書である『俚言集覽』であり、凡例にある通り、江戸語を中心とした「俚言郷語」を集めようとしたものである。ただ、この項目は、全斎ではなく後人が書いたものと思われる点で、弱い面があるが、それでも、俚言を集めようという態度は感じられる。江戸時代の用例として、「東雁」は見あたらないが、「東鳥」は見いだせる。一茶の『七番日記』、文化九年正月に、次の句がある。

口べたの東鳥もけさの春

（岩波文庫 二〇〇三年による。上二一九頁）

この句は、『日本国語大辞典』では「口下手」の用例として取られているものである。<sup>(20)</sup>口下手との関係からも、訛を意識した「東鳥」であろうと思われる。<sup>(21)</sup>

さて、その『日本国語大辞典』は、「東鳥」の項は立てるものの、その用例としては、芥川龍之介「偷盜」を挙げるのみである。芥川龍之介「偷盜」(大正六年『中央公論』四月号、七月号<sup>(22)</sup>)の「東鳥」という語はどういう性格のものであろうか。

猪熊<sup>いのくま</sup>の婆も、腰を反らせて、一しきり東<sup>あづま</sup>鴉<sup>からす</sup>のやうな笑ひ声を立てた。

「偷盜」は、『今昔物語集』卷二十九「不被知人女盗人語 第三」を中心に、卷二十九第六語・卷二十九「筑後前司源忠理家人盗人語第十二」などを加えているようだが(石谷春樹(一九九一))、これらの話には「東鳥」は出て来ず、『今昔物語集』全体でも、「東鳥」が出て来るのは、既述の卷二十八第二語だけである(「東雁」も同様である)。芥川の使った「東鴉」は、芥川にとって今昔語彙<sup>(23)</sup>なのではないかと思われる。つまり、清水康次(一九九五)にいわゆる「典拠を持つことば」なのであろう。

『史籍集覽』や『国史大系』だけを見ていたとすれば、「東鳥」の語に触れることはなかったろうが、「偷盜」を執筆していた頃には、校注国文叢書『今昔物語』(井上頼圀・池辺義象 大正四年 博文館)が既に出ていたから、これを見れば、「東鳥」の語を知ることが出来たはずである。また、校注文学叢書以前でも、前述のように、袖珍名著文庫や、考訂今昔物語を翻刻したものであれば、「東鳥」を使っている。

新村出『東方言語史叢考』は芥川没後(芥川の没は昭和二年七月、刊行は同年十二月)の刊行であるが、「東国方言沿革考」の載った『史学研究會講演集三』は<sup>(24)</sup>見えているかも知れない。芥川は「るしへる」(大正七年)の中で、「新村博士」の論文に言及しているし、この頃から、キリシタンものに触れてゆく中で、新村出の他の論文にも目

を向けていた可能性もあるが、それよりも『今昔物語集』から直接学んだ語であるという可能性の方が高そうである。

ただ、折口信夫も「あづま鴉といふ異名は平安朝からあつた」と書いているように、「あづまがらす」という語は、今昔物語集によらずとも芥川の語彙であつたことも考えられる。

一方、「偷盜」の中で、「東鴉のやうな笑ひ声」を立てる「猪熊のばば」は、東国人であるわけではなく、その意味では、今昔物語との関連は薄いのかも知れないが、「東鴉」の特徴を声で捕らえている点は、芥川がこの語を使用した背景に、今昔物語での言い方があつたように思える。ただ、『日本国語大辞典』が、「東鳥」の「東」を、東国ではなく、明け方の意味に解釈しているのは、「暁鳥」「あけがらす」などの語との関連の他になにか依るところがあるのか気になるが、知り得ない。

以上、「あづまがらす」という語について述べてきた。

本論文は、国語語彙史研究会で発表したものの一部に基づき、発展させたものである。なお、岡島(二〇〇五)も、同会で発表したものの一部であり、本稿と関わる部分がある。

石谷春樹(一九九二) 芥川龍之介『偷盜』論——『今昔物語集』との関わりを通して 『皇学館論叢』24-6

岡島昭浩(二〇〇五)『俚言集覧』『増補俚言集覧』における『今昔物語』からの引用について『筑紫語学論叢Ⅱ』

風間書房

清水康次(一九九五)芥川文学のことは——初期作品の語彙を中心に『光華日本文学』三

注

- (1) 東京堂 国語学叢書 昭和六一年。二二八頁。
- (2) 二二〇頁。昭和二年の雄山閣版では一二二頁。
- (3) 卷二十八の底本は内閣文庫本A(林家旧蔵本)、対校に使われているのは、東大本甲(紅梅文庫旧蔵本)、東北大  
本(新宮城旧蔵本)、実践女子大本(黒川春村旧蔵本)、国学院大本(水野忠款旧蔵本)、内閣文庫本B(岡本保孝  
手沢本)、内閣文庫本C(享和二年識語本)である。
- (4) 東鴈の鳴合たる様にて舌た(傍注「吉く」)□たるは心も不得ぬ事かな。  
『史籍集覧』「今昔物語集」卷廿八、4オ。国立国会図書館の近代デジタルライブラリーによる。
- (5) 『史籍集覧』が平仮名交じりであるのに対し、こちらは片仮名交じりである。  
東鴈ノ鳴合タル様ニテ吉ク(古タイ) □タルハ心モ不得ヌ事カナ。(改訂史籍集覧 二七二頁)
- (6) 東鴈ノ鳴合タル様ニテ吉ク□タルハ心モ不得ヌ事カナ。頭注「吉く、一本作舌タ」(国史大系、一二九四頁)
- (7) 東鴈の鳴き合ひたる様にて舌「だみ」たるは、心も得ぬ事かな。【だみ】は四角で囲む。(袖珍名著文庫『今  
昔物語選』藤岡作太郎校 明治三六)
- (8) 東鴈の鳴あひたるやうなり(考訂今昔9—27ウ)
- (9) 東鴈の鳴合たる様にて吉く(吉く一作舌た)□たるは、心も不得ぬ事かな。(校註国文叢書 下 一四五頁)
- (10) 東鴈ノ鳴合タル様ニテ吉ク□タルハ心モ不得ヌ事カナ。頭注「吉く一本作舌タニ作ル」『攷證今昔物語集』(芳賀  
矢一 大正十年 四〇五頁。底本は田中頼庸旧蔵の東京帝国大学本で、震災時に焼失。)
- (11) 「東鴈(鳥イ)ノ鳴合タル様ニテ、吉ク(吉く一作舌タ)□タルハ心モ不得ヌ事カナ、」三五七頁。なお、丹鶴叢

書本そのものには異本注記はなく「東鴈」である。大系本で校異に使われている新宮城旧蔵本を底本としているものである。

(12) 東鳥ノ鳴合タル様ニテ吉ク「似」タルハ心モ不得ヌ事カナ。頭注「鳥、原作鴈、今従芳本〇吉ク、丹一本芳一本作舌タ〇似、原闕、據押本享本補」(増補国史大系 八七三頁)

(13) 昭和八年。底本は芳賀矢一本。

(14) 昭和一八年。島津久基校訂。

(15) 『国語説鈴』(昭和六年九月) 二二〇頁による。初出の「黒潮」昭和二年一月号は未見。

(16) 講演自体は、明治四二年一月二八日、京都府図書館で、「国語史上の一疑問」と題して行われている。

(17) 大正四・五年頃、同窓吉村洪二氏の勤める京都府立二中生の東京修学旅行のために書いたものであるという。

『折口信夫全集第三十巻』昭和四十三年 中央公論社による。

(18) あづまかり 東雁(名) 濁りて鈍き聲に鳴く雁。東國人の發音に譬ふ。今昔二八「東雁の鳴き合ひたる様にて舌だみたるは、心も不得ぬ事かな」『大日本国語辞典』

あづまかり 東雁【名】「東人(アツマビト)の發音に譬へていふ」濁りたる聲にて鳴く雁。今昔「あづまかりの鳴きあひたるやうにて舌だみたるは」『言泉』

(19) 稲垣泰一編『考訂今昔物語』新典社 平成二年による。なお前述の『今昔物語』(大正二年 尚栄堂)も、これの翻刻である。なお、この尚栄堂版は、片寄正義『今昔物語集の研究 上』二〇七頁に示される、明治十九年辻本尚古堂刊『今昔物語』(筆者未見)と同じ内容のものであらうと思われる。

(20) 初版時は「東鳥」と誤植されていたが、第二版では訂されている。

(21) 「東鳥」の号を持つ人が居るが、この人たちの一部が、「あづまがらす」を意識していたことなどはありそうである。

(22) 「東鴈」の出るのは、四月号掲載分、「一」の中程である。

- (23) ここでは『今昔物語集』らしさを持つと認識していた語」という意味で使っている。
- (24) 注16に記したように、講演自体は京都で行われているので、芥川が聞いたとは思えない。

(文学研究科 助教授)

## SUMMARY

**“Azuma Garasu” and “Azuma Kari” in ‘Konjaku Monogatari shū’**

Akihiro OKAJIMA

“Azuma Garasu (東鳥)” and “Azuma Kari (東雁)” in ‘Konjaku Monogatari shū (今昔物語集)’ were considered.

It referred the history of the dialect consideration, ‘Rigen Shūran (俚言集覧)’ in Edo period, and the description of Orikuchi Shinobu (折口信夫) and Akutagawa Ryūnosuke (芥川龍之介).

キーワード: 「東鳥」, 「東雁」, 『今昔物語集』, 方言意識史, 東国方言史